

道草

映画文学人生論

原作：夏目漱石 (1914) 「朝日新聞」

参考：『吾輩は猫である』 (1905)

監督：市川崑 (1975)

脚本：八住利雄

参考：『麦秋』 1951)

監督：小津安二郎

出演：間宮周吉

菅井一郎

間宮紀子

原節子

間宮しげ

東山千栄子

間宮康一

笠智衆

世の中に片付くなんてものは殆どありやしない

夏目漱石には『吾輩は猫である』の苦沙弥先生のような余裕派のイメージがある。現実にはせつぱつまっていて余裕がなくても、痩せ我慢をしているので、はためには余裕があるようにみえる。漱石文学の魅力は余裕派のユーモアにあると私は思うが、『道草』にはユーモアがとぼしい。

「みんな金が欲しいのだ。そうして金より外には何も欲しくないのだ」と主人公の建三は言う。彼は月額百二十円か三十円ほどの収入を稼いで妻のお住に渡している。明治四十年頃ではかなりの高級取りだが、暮らし向きは余裕がなく、生活費があまることはない。その中から喘息病みの姉に月々の小遣いをやっている。姉は小遣いをもっと増やしてくれという。

妻の父は高級官僚だったが、没落して貧窮し、借金の保証人になってくれと依頼してきた。建三は保証人の印を押すことは断り、その代わりに友人から借りた四百円を渡して義理をはたした。

さらに、建三が三歳から七歳まで養子になっていた頃の養父島田が過去の亡霊のようにあらわれた。用件は金の無心。島田とは十五、六年前、養子縁組が解消され、実家に戻ったことにより法律的には縁が切れているのだが、過去の恩義をたてにくらか用立ててほしいという。

島田の妻だったお常も建三の家にやってくる。



道草

映画文学人生論

建三は。その都度、島田にもお常にも小遣いとして五円程度は渡してやらなければならぬ。

「世の中には片付くなんてものは殆どありあしない。一遍起ったことは何時（いつ）までも続くのさ」と建三はぼやくが、結局、島田とは手切金として百円を支払い、縁を切った。

その百円は建三が洋筆（ペン）を執って、書きまくったアルバイトの原稿料。予定の枚数を書き了えた時、彼は筆を投げて畳の上に倒れた。

その原稿はどうかやら漱石が「ホトトギス」に連載した『吾輩は猫である』らしい。「本というものは有難いもので、一つ作って置くとそれが何時までも売れるんですからね」と島田は言う。「何時までも売れる」本などめったにあるものではないが、『吾輩は猫である』はそんな本になった。

それに比べて『道草』はあまり売れないが、文学の専門家には高く評価されている。特に、余裕派を白眼視していた自然主義の評論家による評価が高い。皮肉なことに『道草』は自然主義文学の代表的作品の中に数えられるほどだ。

『吾輩は猫である』と『道草』は表と裏の関係にある。ただし、市川崑監督の映画『吾輩は猫である』を観ても『道草』の参考にならない。むしろ小津安二郎監督の『麦秋』の老夫婦が浮かべている表情が『道草』の世界に通じていると思う。

道草や片付くなんてものはなし